

第十一話 燻銀のような人間美

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。

我、友どちとめ行きて涙さしぐみ帰り来ぬ。

山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。

皆様、山のこちら側、私の手の届く世界は一応たずねてみました。富、名声、肉欲の快樂、と人々が、とにかく「しあわせ」と呼んでいるものの正体を探ってみました。けれど、ほんとうのしあわせ、私の存在を満ち足りた生命の喜びで押し包んでくれるほんとうのしあわせは、そこにはなかったのです。

それでも私たちの心は呼び求めています。それでもなお、人々は希望を持って、待っています。幸福の青い鳥の訪れを……。山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う……。と歌い続けながら……。

では、どこかに、そのような幸福があるのでしょうか？ ある！ あるのです!!……と断言する前に……ではどこに？……と種あかしをする前に、私は、もう両三度にわたって、皆様とご一緒に考えてみたいことがあるのです。

皆様は、こんな話を聞いたことがありませんか？ あの、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチというイタリー・ルネッサンスの名画家が遺した最大の傑作の一つである「キリストの最後の晩さん」と題せられた名画にまつわる一つのエピソードです。キリストは捕えられて十字架にはりつけにされて殺される、その前夜、最愛の十二弟子を集めて最後の晩さんを取りました。キリストを中央に、十二人の弟子たちがその左右に居流れて食卓に着いている、しみじみとした別れの宴が、ダ・ヴィンチの繊細な絵筆によってみごとに描き出されているのですが、この名画にまつわる一つのエピソード……と申しますのは、ダ・ヴィンチは最初にキリストの顔を描こうとして、そのモデルを探しました。気高くこうごうしい神の子キリストの面影を彷彿とさせるような美しい青年の姿を求めて探ね歩きましたが、なかなか理想通りの美しい顔形というものは、そうはないものです。月日は容赦なく流れてモデルを探し歩く行脚の旅が続きます。そういうある日のこと、イタリーの片田舎の小さな教会堂に足を踏み入れたダ・ヴィンチは、その教会の祈禱台にひざまずいて静かに祈っているひとりの若者を見つけました。何気なく近づいて、フトその横顔を

眺めたとき、ダ・ヴィンチは飛び上がらんばかりに喜んだのでした。それが長い年月、旅から旅に探し求め、夢にまで描いた彼のイメージにピッタリと合った美しい清らかな面影だったからです。彼が、その青年をキリストのモデルに頼んだことはいくまでもありません。ピエトロ・パンジネリと名乗るその青年の、伏し目がちにモデル台に坐っただけであたりには漂う犯しがたい清らかさと気高さとを取り入れて、ダ・ヴィンチはみごとに、神の子キリストの姿を描き上げました。それから十二人の弟子たちの顔に移って、仕事はおもしろいようにはかどりましたが、最後に、あまり描きたくない顔が一つ残ったのです。それは、皆様もご承知と思いますが、キリストは、そのとき、そこに合わせた十二人の弟子のひとり、イスカリオテのユダスという男に裏切られて敵の手に渡されたのですが、そのユダスの顔でした。ダ・ヴィンチは、この裏切り者ユダスの顔を、思いきり、醜い顔に描き上げようと考え、今度は前とは反対に醜い顔のモデルを探し始めました。あるとき、彼は、ある下町の酒場をのぞこうとして、出合いがしらにひとりの酔っぱらいにぶつかりましたが、ハッと顔を上げ、その酔っぱらいの顔を見た途端、ダ・ヴィンチの足はすくんでしまったのです。なんとという冷酷な顔、地獄から脱け出して来たかと思われるような憎しみに光るその瞳……けれどもダ・ヴィンチは、それこそ、自分の求めていたユダスの顔だと気づきましたので、震える足を踏みしめながら、その酔っぱらいに多額の謝礼を約束して、

彼を自分のアトリエに伴い、さっそく、彼の顔をモデルにして裏切り者ユダスの顔を描き始めましたが、顔の輪廓をザッとスケッチし終わったと思うと、ダ・ヴィンチは、どうしたのかポトリと絵筆を取り落とし、すでに前に描き上げたキリストの神々しい顔をしばらく見つめていました。と、突然、何を思ったのか、その酔っぱらいに向かって叫びました。

「君！ 君はだれだ？ 君の名前はなんというのだ？」

酔っぱらいは、ニヤリと笑って答えました。

「おれか、おれの名前は、ピエトロ・パンジネリというのだ。」

ピエトロ・パンジネリ！ ダ・ヴィンチはアッと声をあげました。ふたりは同じ人間だったのです。キリストの顔のモデルになったあの美しい青年と、今、目の前にいる身の毛もよだつようなこの男と……。よく見ると、その顔の輪廓、鼻筋、口元、全然変わってはいない、全く同じなのです。なのに、数年前、キリストの顔のモデルになったときの、あの美しさは跡形もなく消え失せ、今は、世にも醜い形相となり果てていたのです。顔の外側が変わったのではないとすると、いったい、どこが変わったのか？ という一つのなぞを残してこのエピソードは終わります。

ですが、こんなお話をしている間に、大分時間が経ったようです。少し先を急ぎましょう。さて皆様、人間はだれでも、醜いものよりも美しいものが好きだということは争われない事実

でしょうね。人間の魅力の一つは、その容姿の美しさにあるのですから、異性間の愛情もある程度までは人間の外面的美しさが対照となります。もちろん、その美しさは、なにも女性だけに限ったものではないので、ラジオの商業放送を聞いておられる「美人は夜作られる」というキヤッチフレーズが出るのも男性の方でも、負けてはおれぬとばかり「美男子は朝作られる」などというスポーツが流れ出て来るのですから、美しくありたいという願いは男性にも女性にもあるようです。けれども、なんと申しましても、美しさは女性の誇りでもあり、生命でもありませんので、男性に比べて女性の方がはるかに、そのために苦勞をしておられるようです。私のような無精者は、その意味でやはり男に生まれて来てよかったと思っています。ヤレ、パーマだとかセットだとかハイ・ヒールだとか、あるいは、バストだとかヒップだとか、いや全く大変なことだと思えます。女性の皆様が美しくあらんために払われる献身的な苦勞と、あの絶え間のない努力を考えますとほんとうに頭の下がる思いがするのです。

いつでしたか、何気なく机の上に投げ出されてある新聞に見るともなく目をやりますと、下の方に「娘たちよ、美しかれ」という大きな文字が目にとまりました。更によく見ますとその上の方に「母たちよ、御身らも、また、美しかれ」とありました。すばらしい文句だなあと、その新聞を手にとってよく見ると、それは、「マダム・ジュジュ」の広告だったのです。

美しくあるための化粧品に使われる金も相当なものでしょうね。

ところで、こんなことを言うとラジオを聞いておられる女性方から、きついお叱りを受けるかも知れませんが、女の方たちは、いったい、何ぞぐらいまで、ほんとうに美しいのでしょうか？ もちろん人にもよりますが、そんなに長いことではありませんね。やがて、間もなく……それは思ったよりもずっと早く、凋落の秋が来るのではありませんか？ 朝の化粧に鏡をのぞいて、小びんに二、三本のしらがを見て驚かれるのも、目尻に小さな皺ができているのにハッとされるのも、そんなに遠い先のことではありません。楽しいときは早く過ぎ去るもの……そのときになって、私はもう美しくなくてもよいのだと、きれいに思い切れる人は、そうたくさんはないでしょうね。行く春を少しでも長引かせようと、更にお化粧に憂身をやつすことになる、「二十五才以下の人はつけてはいけません」などという化粧品の広告の殺し文句に縛り付きたくなる……けれど、しらがを染めてみても、しわを伸ばしてみても、一枚一枚、無心の木の葉が散り始める秋の訪れを防ぎきれぬわけのものではありません。「人生とは、そういうものなんですよ。私の青春は終わったのですから……」と淋しくおあきらめになりますか？ けれど、私は世の女性方に申し上げたいのです。美しくありたいという願いは正しい願いです。だのに、早くも人生は淋しいものと、その美しさへの憧れを絶ち切らねばならないとすれば、それは、あなたの生命

のどこかにまちがいがあつたからではないでしょうか？ そう、どこかに、小さなまちがいがあつたのです。

はつきり申し上げますと、美しくありたいとの願いを、あなたは、ただ、外側の目に見える肉体の美しさだけに託しましたね。けれどほんとうは、その願いを内側にも向けるべきだったのです。あなたの目を内側に向けて、あなたの美しさをまず内面にたくわえるべきであつたのです。たとえば、いつか、ずっと前にもお話ししたように、高い教養を持ちながらそれを謙虚に包むことを知り、深い大きな愛情を内にたくわえながら、それにおぼれぬだけの理知にも生き、女らしいしとやかさの内に強靱な意志と信念とを宿しつつ、柔和で、貞潔で、しかも、ひたむきな熱情を持つ……そういう内面的な輝きは、それを内に、隠そうとすればするほど、おのずから外に溢れ出て来るものなのです。それが人格のかおりなのです。そこにこそ、人間独特の、ほんとうの人間的な美しさが輝くのです。

肉体の外側の美しさには限りがあります。けれど内面の美しさには限りがありません。年と共に、磨きのかかった、燦銀のような、品位のある内面の美しさが輝き出て来るのです。もしも、あなたが、あなたの美しくありたいとの願いを内側の、そういう内面的な美しさに託していたのであつたなら、あなたは決して、その美しさから裏切られることはなかつたのでしょう。

レオナルド・ダ・ヴィンチの名画にからむあのエピソードの主人公ピエトロ・パンジネリが、気高くこうごうしいキリストのモデルであつたと同時に、冷酷な醜さの権化とも言える裏切り者ユダスの顔のモデルでもあつたという、あのなぞを考えましょう。人間は、顔形はそのままに、美しくも醜くもなれるものだという、この神秘に目を向けましょう。

人間をほんとうに美しくするもの、それは、容貌や化粧品ではなく、もっと別なもの、もっと深いもの、つまり、肉体以外の何ものかなのですね。

皆様、人間は複雑なものだと思ひになりませんか？ それは、親から授かつたこの生命、やがて死んで墓にうずまるこの肉体という、ただの物質だけでできているものと簡単に割切つてしまえない、何か複雑なものなのです。人の世は動物の世界ではありません。生まれて、食べて、寝て、育つて、子供を生んで、やがて、死んで行く……それだけの世界ではなく、何か、もっともっと高いもの、もっともっと深いものを秘めているのが、人の世の生命なのです。

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う……山の彼方……それは案外に、私たち自身の一番深い奥底に広がっている未知の世界であるかも知れませんね。

では皆様、また、来週この時間に……夜もふけたようです。静かにやすみなさい。